

## ガラス若手セミナー参加記

京都大学 工学研究科 分子工学専攻

品川 正志

### Participation report in younger glass seminar

Masashi Shinagawa

Department of Molecular Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto University

ガラス部会夏季若手セミナーは1969年の初めての開催から今年で節目の40回目を迎えた。そのような歴史のある、更に記念の年に若手セミナー初参加となる筆者は普段接することのない他大学の学生や、企業で既に働いておられる若手研究者の先輩との交流と、また今年の夏も京都は連日うだるような暑さで、その暑さから涼しそうな印象のある新潟へ逃れたいという大変罰当たりな動機から記念すべき40回目の若手セミナーに参加することにした。

開催初日当日の深夜出発の夜行寝台列車に乗り込み、寝台の狭さに悪戦苦闘しながらわずかな睡眠をとるとすぐに目的地である長岡駅に到着した。長岡から更に在来線に揺られること1時間で最寄駅である越後湯沢駅に到着した。宿泊施設が用意してくれたシャトルバスに乗り込み、半日がかりの移動も終わりかと安堵していたが、越後湯沢から開催場所であるグリーンピア津南までのバスの行程が想像以上に険しく、

グリーンピア津南に到着した頃には胃の調子が悪くなっている始末であった。しかしグリーンピア津南はスキー場も併設されているようで高地にあるため日差しは強くても風が涼しく非常に過ごしやすく、このセミナーに参加した目的の一つが満たされ非常に満足であった。少しすると他の参加者の方も続々と到着し、以前から参加されてきた方々は久しぶりの再会を喜んでおられるようであった。

セミナーの開会式が終わるとすぐに長岡技術科学大学の松下和正先生や、岡山大学の難波徳



写真1 セミナー開会式の様子

郎先生の講演が始まると先ほどまで和やかだった参加者の方々も松下先生の話に聞き入り、質問の時間には学生も企業の若手研究者の方も積極的に質問されて、非常に活気のある講演となった。

初日の後半の講演では様々な企業の若手研究者の方による企業紹介や研究紹介をされており、このセミナーに参加された企業の概要などを知ることができ、また同じガラス会社という中でも独自技術や、技術に関しても各企業によって得手・不得手というものがあることを初めて知った。企業の概要のほかに、特にセントラル硝子(株)の佐藤陽平さんは企業の概要のほかに現在研究しておられる「新規合成法による有機無機ハイブリッド材料の開発」についての詳しい話をしてくださった。このとき筆者も佐藤さんに質問させていただいたのだが、わかりやすい例をだして説明してくださり、また研究についても実際企業で進めておられる研究の話聞くことで、普段閉鎖的になりがちな大学での研究との相違や、また同じようなところもあるのだという印象をもつことができ非常に有意義であった。

1日目の講演が全て終わり、夜からはこの若手セミナーのメインイベント(?)である夕食懇親会が開かれた。懇親会の中で今回講師として招かれていらっしゃる先生方も学生の時にこの若手セミナーに参加されていたという方がたくさんいらっしゃるようで昔の若手セミナーの様子や先生方が学生だったときの話を聞き、いま研究で世界と競っておられるような先生も筆者と同じような感覚でこの若手セミナーに参加していたのだと知って罰当たりな若手セミナーの参加動機であった筆者は密かに安堵していたのであった。講師の先生のお話とは別に今回この若手セミナーに参加した大学の研究室や、また企業から参加された方の紹介の時間が設けられてそれぞれの研究室や企業の様子を知ることができ、中には小ネタや一発芸を披露される場所もあり途中から先ほどまでの講演での緊張

感はどこへやら……という空気になっていった。日本山村硝子から参加されていた榊井三沙子さんは企業紹介を兼ねてビール瓶についての話をしてくださりおもわず「へえ～」と言うようであった。そのような興味深いやら面白いやらの夕食懇談会の研究室・企業紹介の時間で最も盛り上がったと思われるのは自分の研究室の自慢になるようで心苦しいのだが、筆者の在籍する研究室の紹介の時間だったのではないかと思う。筆者の研究室の面々が壇上に上がると先生方から小啻の要求の声が上がった。どうやら昨年の若手セミナーで筆者の先輩の岡高憲さんが落語の小啻を披露して好評だったそうで、今年はなんと南京玉簾を披露して大変盛り上がった。

夕食懇親会が開きとなった後もこの若手セミナー参加者の更なる懇親の時間は続き、世話役の方がとってくださっていた部屋で再び大宴会の始まりとなった。筆者は移動の疲れで早々にリタイアして眠ってしまったのだが中には朝まで起きていた猛者もいらっしやうで驚きである。そんなに頑張っただけで懇親を深めたら2日目の朝からの講演をリタイアされる方がいるのではないかと心配していたが昨日のことが嘘のように参加者の方々はみな所定の時間に集合されていた。

2日目には講師の方の講演とは別に参加者発表があり、今回のセミナーに参加されている大学の学生による研究発表があった。筆者と同じ学生として他の大学で研究されている方の発表を聞く機会はあまりないので興味深く聞かせていただいたが、発表されている学生の方は筆者と同じ学生とは思えないほどしっかりとした発表をされており、筆者はただ感心することしかできなかった。

2日目の昼から夕方にかけては自由時間として長い時間がとられていたので勉強のことはしばし忘れて同じ研究室の方と外へと出かけることにした。今回の若手セミナーが開かれているグリーンピア津南は冬にはスキー場としても営



写真2 閉会式での賞発表の様子

業しているため、建物のすぐ近くには急な斜面がある。夏にはその斜面を様々な形で利用しており、筆者は斜面をプレーキとニュートラルのみによって下っていく非常にシンプルなつくりのゴーカートのようなものに挑戦することにした。斜面の下から見ていたら大したスピードではないように見えて少し甘く見ていたが体感速度は時速50~60 Kmくらいと結構なもので道もジグザグになっており、中にはコースアウトして道の外に放り出された方もいたそうでなかなかのスリルを味わうことができた。他の参加者の方々もこのときばかりはとグラウンドゴルフを楽しんだり風呂に入りに行ったりと自由に時間を過ごされていたようだった。

夕方からも講演と参加者発表が終わった後には参加者の方は1日目と変わらず大宴会を開き、明け方まで飲んでいらっしやったようである。筆者も2日目は参加したのだが、1日目の懇親会で先生方がおっしゃっていた通り、このガラスセミナーで女性の存在は非常に貴重で、この飲み会でも女性の周りにはたくさん男性が集まっているいろいろな話をされていた。筆者はその熾烈な生存競争に敗れ、早めの就寝となってしまったが、同じ部屋に泊まっていた方は明け方まで宴会に参加しておられたようですがに次の日眠そうにいらっしやったが……。

3日目はこのガラスセミナーの最終日で昼までの講演となっていたが、さすがに2日連続

宴会をしたためか朝からの講演では参加者の方々もかなり眠そうにいらっしやった。しかし議論となると参加者の方々には活発に議論されていて筆者はただただ感心するばかりであった。

すべてのプログラムが終了して閉会式が開かれ、その際にこのセミナー中での参加者発表の優秀発表賞や、議論の際に良い質問をされた方に送られる「グッド質問賞」が発表され、優秀発表賞には京都大学大学院材料化学専攻平尾研究室の清水雅弘さんが選ばれ、新潟の三条で金属加工が有名であることから、チタン純度100%のマグカップが送られ、またグッド質問賞には東京工業大学大学院物質科学専攻柴田・矢野研究室の田口潤さんと長岡技術科学大学松下研究室の川中裕次さんに送られ、お二方共に同様に三条のマグカップが送られていた。三条の金属加工の優秀さを筆者はいままでまったく知らず、iPod nanoの裏側の金属は三条の加工だと松下先生がおっしゃっていて驚いた。

閉会式は無事終了したが、今年のガラス若手セミナーはこれで終わらず、セミナーが終了した8月2日は日本でも有数の花火大会である長岡花火大会の開催日であったため、世話役である長岡技術科学大学の方々や信濃川の河原の席を取ってくださり、セミナーに参加した人に花火を良い場所で見せていただけるということであつた。罰当たりにもこの花火大会も筆者のセミナー参加の理由であつたので非常に楽しみであつた。

また長岡技術科学大学の松下先生の退官に際してこの花火大会で長岡技術科学大学の学生やOBの方々がお金を出し合つて松下先生に対して花火を打ち上げるというイベントも待っているらしくセミナー参加者だけでなく長岡技術科学大学のOBやその家族の方々も集まり、大人数の集まりとなつていた。

毎年80万人あまりの人がこの花火のために長岡に来るらしく、長岡駅から信濃川の河川敷まですさまじいほどの人が向かつており、この

花火大会のすばらしさを物語っていた。筆者もその列についていき、あらかじめ場所取りしていただいていた場所に図々しくも座り、花火の時間までカキ氷などを食べて待っていた。

19:30からの開始とともに大小さまざまな花火が次々と上がっていき、終了するまで休むことなく上がり続けていた。松下先生への花火もとてもすばらしく、筆者も忘れられない花火大会となった。すべての花火が終了した最後に観客から花火師の方々に対してお礼の意味も込めて携帯電話をいっせいに振ると面白いく

向もあり、信濃川の両岸にいる観客が携帯電話を一緒に振ると花火と同じくらいきれいなイルミネーションになって素晴らしい花火大会の締めくくりとなった。

そんな素晴らしい時間から一転して今度は長岡駅までの道りを80万人が一気に戻るので、先ほどまでとは違う熱気を感じながらなんとか駅まで戻り、生まれて初めての夜行バスに揺られながら筆者の初めての若手セミナーを終え、京都まで帰っていったのであった。

#### グランドキャニオンのガラス空中遊歩道



コロラド川面から1,200メートルの高さに、断崖から20メートル張り出した写真のような空中遊歩道が作られている。この歩道の床には、サンゴバン社(仏)の強化ガラスが使われている。

(出所：Glass Manufacturing Industry Council (米)のホームページ(2008.7)の写真と解説より)